

条件文と述語のコントロール性

小林典子

1. はじめに

前件と後件が「と・ば・たら」によって、結ばれる文は一般に条件文と呼ばれ、それぞれの微妙に異なる意味用法については膨大な先行研究で詳細な分析が進められてきている。「と・ば・たら」は、各々の接続形式自体に複数の意味用法（仮定条件、確定条件、反実仮想、継起、疑似条件など）を表していることから、これら条件文の先行研究の記述は複雑である。

本小論の目的は、意志的に述語をコントロールできるかどうかという「コントロール性」に特に注目して「と・ば・たら」による条件文の前件と後件の述語を考察し、記述することである。コントロールは誰 何の立場からなされるのかという観点から「視点」についても触れることになる。最後に「時制」を加えて意味用法とどう関係するのかの整理を試みる。

2. 条件文に関する記述の複雑さ

条件文は日本語の重要な文法項目である上に、その意味の記述が複雑なため、膨大な先行研究がある。有田（1993）は「条件文は、その性質上、意味的な観点から分析されることが圧倒的に多い」と指摘している。条件文に関する先行研究の多くが難解で、複雑になる理由の一つは、条件接続の各々の形式が持つ多様な意味と、それぞれの形式間、すなわち「と・ば・たら」3者間の微妙な差との2重の複雑さのためである。

例えば次の「と」の例を見てみよう。

- (1) 学生だと、学割が使える。
- (2) 目が覚めると、もう10時を過ぎていた。

(3) 彼女は立ち上がると、窓の外を見た。

同じ「と」でも(1)は時とは関係ない、超時間的な関係で、「学生」という身分であれば、その結果、当然「学割が使える」という、前件が成立すれば必ず後件が成立するという条件を示す文である。一般条件、あるいは、恒常条件と呼ばれるもので、このような関係を森田(1990)は函数関係のような条件文と呼んでいる。(2)のような用法は既定の前件の結果、後件を認識した、という既定の事実を述べる文で「発見」の用法(豊田1979)として分類されるものである。(3)は物語調の描写文で使われる継起的な用法の「と」であり、日常会話では「て」で接続されるものである。(2)や(3)はいわゆる「条件」(仮定条件)を述べているのではない。既定の事実である。このように、同じ「と」でも、意味用法は異なっている。

次に、この「と」を「ば・たら」と比較するために置き換え可能かどうかというチェックをすると、(1)'~(3)'のようになる。多くの論考がこのような形式間の差異を基に記述されてきたと言えよう。

- (1)' 学生(だったら/であれば)学割が使える。
- (2)' 目が覚め(?れば/たら)もう10時を過ぎていた。
- (3)' 彼女は立ち上が(*れば ?ったら)窓の外を見た。

ところで、上記の「?」は筆者が直感に頼って付けたものであるが、条件文の研究をさらに複雑にしているのは、文法性の判断をするときに、日本語母語話者であっても、用法の地域差(方言差)が大きいことであろう(真田1989, 田尻1992)。文法性判断を直感に頼るのは危ういことである。また、ことわざなどを見るときは、古語と現代語の差も考える必要がある。

以上、条件文研究の複雑さの一部を見た。複雑にしている原因をまとめると以下のようになる。

- (ア) 一つの接続形式が複数の意味用法を持ち、その意味用法によって前件、後件の制約も異なっている。
- (イ) 異なる条件接続の形式がそれぞれ互換できたり、できなかつたりする。
- (ウ) 文法性判断が地域差、年齢差によってずれることがある。
- (エ) 古語の文法のままのものが諺などに残っている。

そこで、本稿では、複雑な条件文を、できるだけ、シンプルに整理するという目的で、条件形式を個々に断片的に記述するのではなく、コントロール性という観点から統一的に「と・ば・たら」を検討してみる。

3. 視点とコントロール性について

意志的に述語を制御することができることを、コントロール性と呼び、 $\langle + \text{コントロール性} \rangle$ 、できない場合は $\langle - \text{コントロール性} \rangle$ と呼ぶことにする。久野（1973）の「+/-自制」とほぼ同義である。 $\langle + \text{コントロール性} \rangle$ の述語になるのは意志動詞で、久野が「+自制」と呼んだものである。その動詞の行為をするかしないか意志で決定することができ、行為を自由に制御できるという意味である。従って意志動詞以外の述語は $\langle - \text{コントロール性} \rangle$ となる。

$\langle + \text{コントロール性} \rangle$ の動詞	行く 食べる 飲む 話す 歌う 閉める 置く 切る 乗る 壊す 等
$\langle - \text{コントロール性} \rangle$ の動詞	閉まる 開く 消える 流れる 乾く 凍る 燃える 困る 疲れる 等

上記の表は動詞自体が持つコントロール性を示したものである。しかし、 $\langle + \text{コントロール性} \rangle$ の意志動詞が使用された場合でも、 $\langle - \text{コントロール性} \rangle$ になる場合がある。

条件文を考える場合には、基本的には、前件、後件のいずれか視点のおかれた主語の立場から見て、意志的にコントロールできるかどうかが重要となる。となると、条件文がどのような視点を取るかが問題となってくる。複文の視点の場合、一般には主文の主語に視点が置かれることが多い（野田1995）が、条件文は特殊なようである。詳細な検討はしていないが、普通は話者である「私」により近い立場におかれるようである。しかし、「発見」の用法だけは前件の条件節（従属節）の主語の方に視点が置かれるのが常である。

以下の①～④は動詞自体は $\langle + \text{コントロール性} \rangle$ のものについて、文レベルでのコントロール性がどうなるか（+）か（-）かを示したものである。

(ア) 非過去 (+)

未来時にする動作を動作主が決めることができる。

例：「行く，食べない等」

(イ) 過去 (?)

その動作は既に為されてしまっているため，コントロールできないとして (-) にした方が説明がつく場合と，意志動詞なのだから (+) とした方が説明がつく場合とがある。そのため，(?) と示しておく。

例：「飲んだ，飲まなかった等」

(ウ) 可能表現 (-)

できるかできないかという可能性を示す状態表現で意志動詞ではない。例えば，「外国語を上手に話せる」という状態にいくらなりたいたいと思っても，できない場合はできない。思い通りにはならない。

例：「話せる，聞こえる，見えない等」

(エ) 受身 (-)

影響を受ける側の立場から見ると，その行為は自由にコントロールできない。

例：「閉められる，壊される等」

(オ) 異主語 (-)

例えば，母親の立場から見ると「子供が食べる」の「食べる」はコントロールできない。たくさん食べさせたいと思っても，食べるか食べないかは子供が決めることである。従って，子供の立場から見ると，<+コントロール性>であるが，母親の視点（立場）に立つと，<-コントロール性>となる。

例：「子供が食べる，等」

(カ) 習慣 (-)

習慣は決まりきったことになっていて，一々意志決定するものではないので，習慣は<-コントロール性>と見なすことができる。また，習慣を (-) とすることで，条件文全体に統一的な説明が可能となる。

例：「いつも家へ帰ると，宿題をする」

以上は意志動詞について見てきたが，無意志動詞 (<-コントロール性>) でも，その使役形は，<+コントロール性>となる (例：「凍らせる」)。また，名詞文，形容詞文，感情表現など状態性の述語は<-コントロール性>である。

以下の例は動作主の立場からみたコントロール性を (+)・(-) で示したものである。

例： 行く／行かない (+)。上手に話せる (-)。火が消える (-)。
火を消す (+)。寒い (-)。眠くなる (-)。凍らせる (+)。

4. 条件文とコントロール性

4. 1 前件と後件のコントロール性の関係

仮説 1, 2 について見ていきたい。

仮説 1 条件表現では前件と後件の両方が<+コントロール性>とはならない。

仮説 2 1 回限りのことで(習慣ではない場合)前件も後件も<+コントロール性>の場合は継起「～てから」のような意味となる。

以下の実例 (Kaiser 他 2001) の前件, 後件について仮説 1, 2 を検証していこう。文の後ろの () の中の +・- は, 例えば (+・-) の場合は, 前件が (+), 後件が (-) であることを示す。(+) か (-) については, 3 節に述べた(ア～カ)に基づいている。

「と」

- (4) 寒くなるとフグがおいしくなる。(-・-)
- (5) 地方を訪れると必ずこの言葉を聞く。(+・-)
(この「聞く」は耳に入ってくるという意味で使われている。)
- (6) 一方で誤ると, 結局両方で失敗する。(-・-)
- (7) 事務所に電話すると, 所長が出た。(+・- 異主語)
- (8) 昔は合戦の日になると, 母親がさきだんごを作ってくれたものです。
(-・- 習慣)
- (9) 市場金利が上昇すると, 利率を上げる。(-・- 習慣)
- (10) バリと比べると, ずっと素朴でわびしい。(+・-)
- (11) どろぼうは警察を見ると逃げていった。(+・+)

「ば」

- (12) 成績がよければ、合格書が出てくる。(－・－)
 (13) いい土地があれば、すぐにも移る。(－・＋)
 (14) がんばれば、いつかはチャンスがある。(＋・－)
 (15) ピーク時をずらせば、まだ席はとれる。(＋・－)
 (16) 障害とは人が歳をとれば、必ず持つようになるものだ。(－・－)
 (17) シートベルトをしていれば助かった。(＋・－)
 (18) どうすればいいだろう。(＋・－)
 (19) 鳥と言えば、近くにはスズメかハトくらいしかいない。(＋・－)

「たら」

- (20) 大きくなったら、絵かきさんになりたい。(－・＋)
 (21) もう少し涼しくなったら、地図を片手にあちこち探検しよう。(－・＋)
 (22) こんな領収書を税務署に出したら、すぐに突っ返される。(＋・－受身)
 (23) 困って即興でソロ演奏したら、これが意外に受けた。(＋・－)
 (24) 操業停止がなかったら、営業利益は増えたはずだった。(－・－)
 (25) この機会を逃したら、永遠にチャンスは来ないのではないか。(＋・－)
 (26) 遊びと勉強の両方がやれたらいい。(－・－)
 (27) 開けたらなるべく早く食べてしまってください。(＋・＋)

(4)から(26)はすべて新聞からの実例、(27)は食品のラベルにあったものである。「と・ば・たら」のできるだけ様々な意味用法をとりこんで、8文ずつ並べてみたが、この例で、見る限り、前件後件が(＋・＋)となっているのは、「と」の(11)と「たら」の(27)の用法のみである。そして、これは仮説2で述べたように時間的な継起の意味を担っている。

4. 2 「非過去／過去」の対立との関係

前件について言えば、「と」の場合は非過去形、「ば」の場合は古語の未然形と已然形の両方を含んでおり、「たら」の場合は過去形となっている。前節で、意志動詞であっても過去形になると、コントロール性が(－)になると見なす考え方の可能性を示したが、もし、そのように考えれば、仮説1から「たら」節の場合、前件は常に(－)となり、後件には(＋)の動詞が自由に入ることになる。これは、「たら」節の後件に意志表現が自由に入ることと矛盾しない。

一方、「と」の継起的な用法、例文(11)を見てみよう。このように(+・+)接続の後件は常に過去形となる。作例(28, 29)を比較すると、(29)は座りが悪いように感じる。

- (28) 昨日、太郎は書斎に入ると、手紙を書いた。
 (29) ?明日、太郎は書斎に入ると、手紙を書く。

従って、仮説2で示した(+・+)というもの、過去形を(-)と考えれば、仮説1と矛盾するものではない。

4. 3 異主語の場合

(7) 事務所に電話すると、所長が出た。

(7)の場合、動詞自体は「電話する」「出た」でコントロール性は(+)と考えられるが、「出た」の方は過去形である上、前件と異なる主語「所長」が「出た」ということから異主語のため(-)となる(3節オ)。従って、(7)は(+・-)という組み合わせということになる。このような異主語の例をもう少し作例で見よう。(30)は過去形、(31)(32)は非過去形であるが、異主語であることから、<-コントロール性>と見なしてよい。

- (30) 電話すると、手伝いに来てくれた。(+・-)
 (31) 子供を散歩に連れていくと、寄り道する。(+・-)
 (32) やれと言うと、する。(+・-)

また、次の例文も異種語という観点から(-・+)と考えることが可能だ。

- (33) 動くときと撃つぞ。 坪本(1986), グループジャマシー(1998)

これについては、グループジャマシー(1998)は「『と』には前後の動作が間を置かずにほとんど同時に起こるという意味があり、「たら」よりも脅しの表現となる。」と説明している。これは、益岡(1993)が「ト形式の文の基本的特徴は二つの事態の一体性を強調する点にある」と述べていることと重なる。しかし、いくら一体性があっても、33の主語は「おまえが動くとき、私は撃つぞ」という読みしかできず、「おれが動くとき、おれは撃つぞ」とは読み取

れない。つまり、異主語としか解釈できない。また34の場合、少々間を置いても成立するのではないだろうか。それは、コントロール性で説明できるのではないだろうか。

34) そんなことすると先生に言いつけるよ。

4. 3 条件文のまとめ

先行研究の成果に従って条件文を1)~5)の用法に分け、それぞれに過去／非過去の制約と、コントロール性(+)(-)を付け、以下のような整理を試みた。過去形になるだけで、<-コントロール性>となるという見方も前述したが、まだ十分詳細に検討したわけではないので、ここでは、過去／非過去を別に示し、過去形のコントロール性については、非過去形における(+)(-)として示してある。(+/-)というのは(+)(-)どちらでもいいという意味である。

1) 当然・自然・反復・習慣

(+/-)と, (-)非過去形

- ・そこを曲がると銀行がある。
- ・学生だと学割が使える。
- ・親が叱ると子供は反抗する。

2) 発見

(+)と/たら, (-)過去形

- ・家へ帰ったら/帰ると、手紙が来ていた。
- ・スイッチを入れたら/入れると、青い明かりがついた。

3) 仮定

(+/-)ば/たら, (+/-)非過去形(但し共に(+))はない

- ・今頼めば/頼んだら、引き受けてくれるだろう。
- ・今度の電車に乗れば/乗れたら、乗ろう。

4) 継起, 時

(+/-)たら, (+)非過去形

- ・あの木の所まで行ったら、休もう。
- ・3時になったら、仕事を休憩する。
- ・国に帰ったらお父さんによろしく言ってください。

(+/-) と, (+) 過去形

- ・岡山に着くと、普通電車に乗り換えた。
- ・冬になると、家族でスキー旅行に出かけた。

5) 反実仮想

(+/-) ば/たら, (+/-) 過去形 (但し共に (+) はない)

- ・あと10分早く出かけていれば/いたら, 事故に巻き込まれたらろう。
- ・もっと安ければ/安かったら, 買った。
- ・もっと安くすれば/したら, 売れたらろう。

上記1)～5)のまとめから要点をあげると、次のようになる。

- ・英語であれば, when と訳されるものもあり, 仮定条件ばかりではない。
- ・主文が過去か非過去か, ということと, コントロール性のある述語が誰の視点から述べられているのかということが重要である。
- ・2)の用法では条件節と主文では必ず視点が変わり, 主語が異なる。
- ・4)のような時間的な順序(継起)のときには両方の述語の視点が同じでも構わない。過去か非過去かによって「と/たら」を選ぶことになる。

(35)は仮定条件のとき, 条件節と主文のコントロール性がどちらも「+」にならない, ということに注意を向けさせる日本語学習者用に作った練習問題の例で, この場合, 条件節の主語は「私」であり, 「私」の視点から見て, その条件の帰結である主文はコントロール性が「-」でなければならない。そのため他者が主語になり「くれる」が選択されることになる。

(35) 木村さんに頼めばやって(もらう・くれる)。

5. おわりに

条件文については, 各々の意味用法についての詳細な記述が先行研究によってなされ, 各々については, かなり詳しい意味の解析がなされていると言える。

本稿は、逆に、一つ一つの条件文についての意味記述をすることを目的とはせず、全体的に眺めていく姿勢をとった。本稿では、仮説をたて、これの検証を試みた。

仮説1 条件表現では前件と後件の両方が<+コントロール性>とはならない。

仮説2 1回限りのことで(習慣ではない場合)前件も後件も<+コントロール性>の場合は継起「～てから」のような意味となる。

コントロール性を柱として、「と・ば・たら」の条件接続を整理しようとした。「なら」について、扱わなかったのは、益岡(1993)の言う、「文の概念レベル」が命題レベルから外に出ていて、他の三つとは、差異が大きいと考えたからである。

大筋で、本稿の仮説は正しいのではないかと考えるが、今後はここで取り上げなかった個々の意味用法、制約と本稿で試みた仮説とをどのように結び付けていくか更に検証する必要がある。今後の課題としたい。

[参考文献]

- 有田節子(1993)「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志(編)「日本語の条件表現」くろしお出版
- 久野すすむ(1973)「日本文法研究」大修館書店
- グループジャマシイ(1998)「日本語文型辞典」くろしお出版
- 真田信治(1989)「日本語のバリエーション」アルク
- 田尻英三(1992)「日本語教師と方言」『日本語教育』76
- 坪本篤朗(1986)「andとト——文連結のプロトタイプと範疇化——」『応用言語学講座 2巻：外国語と日本語』明治書院
- 豊田豊子(1979)「発見の【と】」『日本語教育』36
- 野田尚史(1995)「現場依存の視点と文脈依存の視点」仁田義雄(編)「複文の研究」くろしお出版
- 蓮沼昭子(1993)「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志(編)「日本語の条件表現」くろしお出版
- 益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」益岡隆志(編)「日本語の条件表現」くろしお出版
- 森田良行(1990)「日本語学と日本語教育」凡人社
- Johnson, Yuki(2000) Conditionals and Modality: A Reexamination of the Func-

tion of Ba and Volitional Expressions, 『世界の日本語教育』10
Kaiser, Stefan, Yasuko Ichikawa, Noriko Kobayashi, Hirofumi Yamamoto (2001),
JAPANESE: A Comprehensive Grammar, London, Routledge Ltd.

本研究は平成11年度～12年度科学研究費補助金基盤研究C⁽¹⁾（課題番号
11680308 研究代表者 小林典子）からの助成を受けている。